

『過零丁洋』 文天祥

過零丁洋	文天祥	零丁洋を過ぐ	文天祥
辛苦遭逢起一經	辛苦遭逢一經より起こる		
干戈落落四周星	干戈落落たり四周星		
山河破碎風漂絮	山河破碎風絮を漂わし		
身世飄搖雨打萍	身世飄搖雨萍を打つ		
皇恐灘邊說皇恐	皇恐灘邊皇恐を説き		
零丁洋裏嘆零丁	零丁洋裏零丁を嘆く		
人生自古誰無死	人生古より誰か死無からん		
留取丹心照汗青	丹心を留取して汗青を照らさん		

【意解】

わたしの辛苦の半生は、經書を勉強して科擧に合格し、狀元進士（首席）となったことから起こった。その後、元軍との転戦に明け暮れ、あわただしく四年が過ぎ去った。その間に国家はまるで風が柳の絮（綿）を吹き散らすように混乱し、わたしの身の上といえは浪間にただよいながら雨に打たれている浮草のようなものである。かつて蘇東坡は皇恐灘を通り過ぎたとき、恐怖の早瀬を自分の置かれた境遇になぞらえ涙を流した。いまわたしは零丁洋を過ぎ、その名のとおりのひとりぼっちの哀れな姿を嘆いている。しかし人間、昔から死ななかつた者が一人でもいるだろうか。わたしは死を恐れず、まごころを貫き通して、歴史を文天祥の名によって照らそう。それこそ男児の本懐である。

【作者略伝】

殉国の狀元宰相

文天祥 一二三六―一二八三？
字は宋瑞、また履善。文山と号した。吉州蘆陵（江西省吉安県）の人。二十一歳のとき狀元（首席）で進士に合格したが、しばしば直言して免職となった。
徳祐元年（一二七五）元軍が南下すると義勇軍を組織して奮戦、翌年に右丞相として和交渉に赴くが、元の丞相バ

時代区分	国名	出来事
唐時代	唐	745 楊玉環、貴妃となる 751 タラス河の戦い 755 安史の乱おこる 816 李愬、呉元済を討伐 875 黄巢の乱おこる 907 朱全忠、唐を篡奪
五代十国時代	後梁・後唐・後晋 後漢・後周	
宋・遼・金時代	遼	960 趙匡胤、宋を建国 979 宋、天下を統一 1053 狄青、枢密使となる 1127 北宋の滅亡（靖康の変） 1161 采石磯の戦い 1234 金の滅亡 1279 南宋、崖山において滅ぶ
元時代	金	
	南宋	
	元	1370 元の順帝、大都より逃亡 明の天下統一
明時代	明	1402 永楽帝即位 1433 鄭和、最後の航海より帰る 1449 土木の変 1519 寧王の乱 1582 宰相張居正死す 1644 明の滅亡

ヤン（伯顔）と口論になり捕えられた。
しかし脱出して再び義軍を起こし、福建、広東の各地を転戦したが祥興元年（一二七八）捕虜となり、大都（北京市）の土牢に幽閉された。

元軍に捕えられたとき、元将張弘範はさらに南宋の最後の拠点厓山（広東省会県の南



文天祥画像

海上にある島）を追撃するのに文天祥を帯同した。この詩はその途中、零丁洋を渡るとき之作。零丁洋は広東省中山県の南、すなわち珠江の河口の外洋。元の世祖（勿必烈）の降伏勧告にも屈せず三年後ついに刑死した。

後世に影響を与えた代表作、三〇〇字に及ぶ長編古詩「正気歌」がある。この詩は土牢に閉じ込められている自分の心境、覚悟を述べたものである。序文だけ紹介すると、「いま自分は、床もない小さな部屋に閉じ込められている。間口は八尺、奥行きはその四倍、そこははじめとして暗く、穀物や野菜の匂い、他の囚人たちの人いきれ、便所や動物の死骸の臭気など環境が悪い。にもかかわらず私は病氣にもならず、元氣いっぱいだ。私を支えるものは何か、それこそ正気だ」と。「正気」というのは孟子が言いはじめた概念で「天地の正しい道筋に従って生きていけば、自分の中に充実感が生じる」という意味である。（「孟子」公孫丑章句・上）

この詩を詠んで幕末から明治にかけて藤田東湖、吉田松陰、広瀬武夫らが模倣作を作っている。

【時代背景】

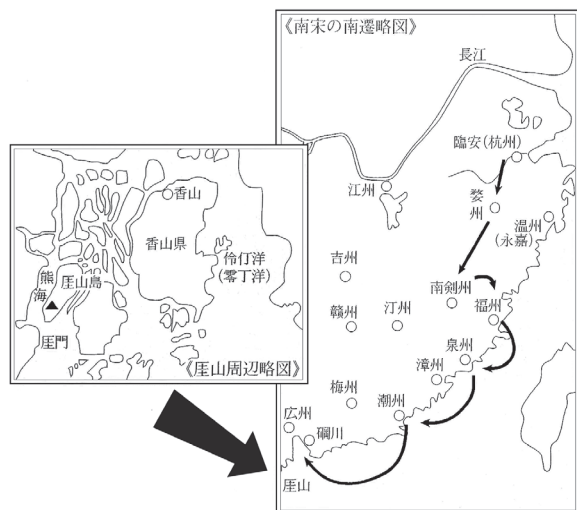
北宋が滅びてから、南宋には北宋の経済への負担がなくなり、南宋の富は南宋自身が消費してなお余りあるものになった。北方を征服した異民族国家に、かなりな安全保障費を払っても立派に引き合うのである。だから金で平和を

買おうという国策におちついたのである。

北方の異民族国家が「金」である間は、この政策はそれなりの成果を挙げた。北宋を滅ぼしてから半世紀もたつと、女真族の「金」の中国化は急速に進み、南北おたがいは国家の性格を知り合っていたから、大体において平和は維持された。

しかし、「金」の背後では、西のモンゴル高原で遊牧民族が統一の機運に向かいチンギスハーンが諸部族を統一し、その後西域や中央アジア、東南ヨーロッパを攻め西夏王朝を滅ぼすが、チンギスハーンが病死、その後を継いだオゴタイハーンが「金」を滅ぼす。

ついに南宋は領土をモンゴル国家とじかに接する状態になるがモンゴルはその後すぐには南宋を攻めず西の方へゆく。チンギスハーンの孫のバトゥを総司令官に東ヨーロッパまで迫ったワール



シュタットの戦い一二四一年ではポーランドとドイツの連合軍が、モンゴル軍を迎え撃つが惨敗しポーランド軍が全滅し、ハンガリー一帯が廃墟となった。進撃が続くとヨーロッパ全体がモンゴル軍の支配下になる危機であったが、オゴタイハーンの死によりモンゴル軍が急遽引き返したので難を逃れたのである。

十三世紀はまさにモンゴル族の時代だと言って過言ではない。月日経ち、チンギスハーンの孫のメンケハーンが即位すると弟のフビライと共に南宋に大軍を南下させ、メンケハーンが陣中で亡くなると、いよいよフビライが即位してフビライハーンとなり一二六〇年都を大都に移して国号を「元」と称した。

元軍が南宋へ南下を始めた同じ年に日本に第一回の元寇があった。(鎌倉時代)

七・八年の戦いで南宋は滅ぼされた。その戦いで文天祥が登場することになる。彼は生涯「自分は状元である」という自負を持っていた。役人生活の中で時の政権と合わず辞職したりしたが、元軍が南下すると率先して義勇軍を募り転戦し、やがて朝廷に招かれて都臨安に入り丞相になる。「状元宰相」といわれる所以である。

【鑑賞】

首聯 自分のこれまでの半生を総括するように「辛く苦

しい人生との出会いは経書を学んだこと、つまり物事の筋を通す大切さを学んだことにはじまった」「二経」は経書を指す。宋学は理学「理」は物事の筋、原理。「干戈」は戦争のこと。文天祥が義勇軍を旗揚げしてから四年が経っている。

頷聯

故国と自分の現状をたとえを用いて描いている。

一二七八年（祥興元年）の夏、広東省東部を転戦につぐ転戦をつづけていた文天祥軍に疫病が蔓延し、たおれる兵士が続出し元軍と戦うどころではなくなった。病は母を襲い六十五歳で亡くなった。

ひと月後、もっとも愛していた長男も後を追った。文天祥自身も過労と栄養失調によって左の眼が失明直前にまどまった。

頸聯

わが身のいきさつを述べる。戦に負けたこと、捕虜になったことを「皇恐灘」「零丁洋」という二つの地名を織り込んで述べている。

去年の負け戦では、皇恐灘のほとりで皇恐を説いた。「皇恐」は恐れ多い苦難の意味だが。ここではわが宋王朝を守れない恐れ多さを部下たちに説いて聞かせ「頑張ろう」と決意を新たにしたが、武運つたなく捕虜となって、いま零丁洋に來たところで零丁を嘆いている。「零丁」は落ちぶれる、つまり落ちぶれて捕虜になった自分を嘆いている。

尾聯

自分の信念をあくまで貫く覚悟を述べて結ぶ。「汗青」は文字を書き記す竹だが、歴史記録の別名として使われておりつまり「私のまごころで歴史の記録を明るく照らし出そう」と武人らしいストレートな表現をしている。

【参考其の一】

文天祥を救国に駆り立てた思想の背景には朱子学がある。

【朱子学】（宋学）

儒教の經典「論語」「孟子」「大学」「中庸」の四書に詳細な注を施し集大成した学問を朱子学といい十一世紀の北宋時代の周敦頤しゅうとんい、程顥ていこう、程頤兄弟の新しい儒学を朱子が集大成したため「程朱の学」ともいい全体をひっくるめて「宋学」ともいう。

朱子学をスローガン化した「大義名分」と「尊王攘夷」という二つのことばは、国家の緊急事態の時の行動指針として多くの人に叫ばれ、日本にも重大な影響を与えた。

「大義名分」は人間のふみ行うべき正しい道という意味の「大義」と君、臣、父子などの間の正しい秩序という意味の「名分」とをひつつけた言葉であり、「尊王攘夷」は中華の王室を尊び、異民族打ちはらおうという決意を述べた言葉である。

【家族愛】

彼の温かい家庭人としての面を映す代表作の一つに「六歌」がある、崖山の戦に敗れた元の至元十六年（一二七九）九月、北京に護送されていく途中の作。妻、妹、女、子、妾、自分を詠じている。

有妻有妻出糟糠

妻つま有あり妻つま有あり糟糠そうこうより出いづ

自少結髮不下堂

少わかきとき自より結けつ髪ぱつして堂どうより下くださず

乱離中道逢虎狼

らんり
ちゅうどう
ころう
あ
乱離の中道虎狼に逢い

鳳飛翩翩失其凰

鳳は飛ぶこと翩翩として其の凰を失う

将雛一二去何方

雛の一二を将いて何くの方にか去る

豈料國破家亦亡

豈に料らんや国破れ家も亦亡ぶを

不忍舍君羅襦裳

君きみの羅らの襦じゆうと裳しょうとを舍すつるに忍しのびず

天長地久終茫茫

てんながちひさついはうぼう
天長く地久しく終に茫茫

牛女夜夜遥相望

牛女夜夜遙かに相望む

嗚呼一歌兮歌正長

あ
あ
ひと
うた
うた
うた
まさ
なが
まう

鳴呼一たび歌えば歌は正に長し

悲風北來起彷徨

悲風北より来たり起ちて彷徨す

「意解」

妻よ妻、苦勞をとにした糟糠の妻よ、若い時に結婚し

ところが戦乱の最中、お前は元の軍勢に捕えられ、わたしはかろうじて逃れとうとう連れ合いのお前を失ってしまった。

お前は幼子三人を連れてどこへ行ったのやら。思いもか
げず、国家は破れ家族もまた消滅してしまうとは。

お前が身に着けていた絹の上着とスカートは、とても棄てる気にはなれない。

天地のつづくかぎり決してお前を忘れないが、天地はただ広がっているばかり。牽牛けんぎゅうと織女しよじょの二つ星も、夜な夜な、遠くはるかに眺め合うだけ。

ああ、ひとたび歌を歌えば歌声は遠くまで響いてゆき、
悲しい風がお前のいる北から吹いてきた、わたしは起き上
がって辺りを歩きまわる。

引用資料

中国歴史人物伝……文天祥の生涯「殉国節義の人」

著 尚文社ジャパン

中国名詩選(下)……松枝茂夫 編 岩波書店

漢詩を読む 4……宇野正人 平凡社

漢詩を読む……………中国のくらしのうた（秋―冬）

佐藤 保
NHK出版